

[003]附属環境工学研究教育センター研究活動報告

<https://doi.org/10.15017/4485660>

出版情報：附属環境工学研究教育センター研究活動報告. 3, 2021-06-30. Center for Research and Education of Environmental Technology, Faculty of Engineering, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

巻頭言

目に見える形での SDGs への貢献を期待して

九州大学大学院工学研究院
工学研究院長 園田 佳巨



本環境工学研究教育センターは、箱崎キャンパスにおいて研究活動を行っていた旧環境システム科学研究センターを前身とし、2008年に附属循環型社会システム工学研究センターに改組、2018年に現在の教育活動を中心に据えたセンターへと、時代の流れとともに本組織に求められるニーズの変化に対応するために姿を変えてきました。

以前は、我が国およびアジア地域の環境保全に関する種々の研究を行うための工学研究院の附属施設として位置付けられていましたが、世界中の人々に SDGs（持続可能な開発目標）が今後の極めて重要な課題であると認識された現在においては、アジア地域に限らず、地球規模の環境問題に真摯に取り組み、環境共生型社会を実現するために、環境負荷となる排出やエネルギー消費をできる限り抑制することが求められています。さらに、これらは現在の先進国における豊かな社会生活を損なうことなく達成することが期待されています。そのためには、経済性を考慮した総合的な視点のもとで、持続可能な循環型社会の構築に直接的に寄与できる環境技術開発の研究が必要とされています。本環境工学研究教育センターは、これらの社会背景の目まぐるしい変化に対応するため、グローバル課題・ローカル課題・インターフェース課題の3つの異なる研究ユニットで個々の問題を解決する組織に生まれ変わっています。

グローバル課題には、急速な経済成長を遂げているアジア・アフリカ地域において、産業活動の発展に環境汚染の防止対策が追いつかない現状や地球温暖化による異常気象がもたらす種々の問題について地球全体としての対策の検討を行い・対応する技術の開発を行っております。

ローカル課題としては、我々に身近な生活圏で発生する廃棄物の処理に関する問題や世界各地に偏在する有用地下資源の確保に関わる問題など、地域によって大きく条件が異なる問題について適切に対応・解決するための技術開発を行っております。

インターフェース課題としては、ある地域で発生した汚染物質が、他の地域へ大気や海流によって運搬・拡散され、ローカルな問題がグローバルな問題へと発展してしまうプロセスに着目し、両者の境界域における連関機構の解明とグローバルな問題への進展を防ぐための技術開発を行っております。

工学研究院は、本環境工学研究教育センターで行う活動を基盤として、目に見える直接的な形による SDGs への貢献が果たされ、世界をリードする環境技術のスペシャリスト・研究者が続々と輩出されることを期待しております。

関係者の皆様には、より一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。